

# タンDEM

嶋田正文

< 1 >

葉桜の頃、庭で枝払いをしているときに父は脚立を踏み外して足をくじいた。スポーツ好きで強情っ張りの父は最初その件を黙っていたが、一步でも踏み出そうとすれば膝に錐をもみ込まれるような激痛が走ったらしい。数時間して膝まわりが倍に腫れて熱をもち、内出血特有の毒々しいアザが浮いた。その患部を見せられた母が、アッと叫んだのは当然だった。母から問い詰められ、しぶしぶ痛みを認めたが、父はそれでも病院や接骨院へ行こうとせず、湿布薬をと母に頼んだ。もう夕飯どきだった。やや遠い所にあるドラッグストアのチェーン店まで自転車を飛ばして行ったのは僕だ。

僕に手伝わせて膝を湿布薬でくるんだ父はこれでもうよしと宣言し、母にいつもの晩酌を用意させた。母に心配をかける父のやせ我慢は、はた目にも痛々しく、先ずレントゲン検査を受けるべきだと僕は思った。でも家族がそんな進言をすれば、父は必ず意地になってしまうから皆は黙っていた。

その二週間後、せっかくのゴールデンウィークで休みなのに、朝早く僕は母に起こされた。前夜そう決まったからだ。でもまだ六時前で、約束が違うと寝ぼけ眼でブツブツ言いながら居間へ出てみたら、父はもう朝食が済んだ顔で、「早めに出るぞ、亮」とだけ言って関東の道路マップをみていた。母が湯気の立つ味噌汁を僕の前に置いた。中に卵が落としてあって僕の好物だ。高速道路の行楽ラッシュ渋滞をテレビが恒例のごとく報じている。それで父が東北自動車道に乗らないつもりだとわかった。

< 2 >

父の運転で僕が助手席に坐った。オートマチック車だから左膝に負担は掛からないという。母が用意してくれた二人分の昼食やポットや、僕の着替え、サイクリング用の補助具が後部席に載せてある。車を出す時、やっと起きてきた妹がパジャマ姿のまま母と並んで門の内から手を振り、嬉しげに僕らを見送った。ちえっ、妹は女でよかったな。

父は道をまちがえても決して間違っただとは自分で認めない人なんで、道中僕は地図とにらめっこだ。小さい頃、父のお供で遠い千葉の九十九里浜までイシモチの投げ釣りに行った。豊漁だったが帰路正しくない方向へ走ったらしく、印旛沼に突き当たったりして真夜中過ぎても、まだ埼玉の我が家に帰着しなかった。子供だった僕は眠いし空腹だし、父はいつ頃着くとも言わないし、幼心にほとんど疲れた覚えがある。父は、僕をよく釣りに連れていきたがったが、道に迷った例が一度や二度じゃない。お陰で僕は地図をよむ勘が皆よりも発達したかも知れない。

この日の目的地は渡良瀬遊水地だ。道路地図によると、この遊水地は関東平野の中央部やや北寄りにあり、埼玉・群馬・栃木・茨城の四県が寄り集うその境界線上に接している。一般国道122を一路北上し、やがて前方に浮かび出る上州の赤城山を望んで群馬県に至り、その最南端に近い館林という町で今度は東西を貫く国道354のバイパスへ曲がり入り、道なりに東進するルートだ。

< 3 >

「膝はどう、だいじょうぶ？」

途中僕は遠慮ぎみに父へ聞いた。家を出て順調に走り一時間ちょっと、水量のやせた利根川を越え、ようやく沿道の左方に、山影を含む田園が開ける群馬県に入った辺りだ。僕を見ず、父は黙ってうなずき返し、シートベルトの下でちょっと身じろぐと唇を軽く噛んだまま運転を続けた。

きっとまだズキンズキン痛むのだ。父はどうとう近所の接骨院にも行かずじまいである。僕が免許を取れる年齢なら、今のような父に運転はさせないのだが、現実には地図を見守るしかない。

「次の交差点信号で右折して。そこを曲がると三百メートル先の正面で東武鉄道の陸橋を越えるはずだから」

すでに地図係として優秀な僕を父は疑わず、流れに合わせ、道路のセンターラインに車を寄せた。古河方面 354 と示された予告標識の下を一瞬で通り過ぎる。この 1 2 2 号は幹線道路のせいか交通量が多く、特に大型の貨物トラックが前後に連なっていた。初めて訪れる場合、運転者独りでは目的地への分岐点を見落としやすいことだろう。

「あと十五キロ弱だ」僕は地図から顔を上げた。

「眠いのか」父は左右のウィンドウを少し下げ、風を入れた。

やがて栃木県藤岡町の南端で、遊水地の全体が眼下に広がる土手道へ上がった時、初めて父は車を停めた。ここまで一度も休まず来たのである。車外に二人で出てみた。父も僕も初めて眺める絶景だった。

「母さんや薫も連れてきてやれば良かったな」

「うん」僕もそう思った。「気が清々するね」

< 4 >

小高い土手の真下から向こうへ、風になびく一面の葦原が延々と伸び、隠れ水の匂いがする低湿地帯を緑濃く埋め尽くしている。葦原の総面積は、想像し難いほど広大で、遙か彼方、青空の白雲と接する地平線までつづく。悲しいほど深い葦原の所々に、大小の立ち木が忘れ形見のように散在する。父の話では、かつてこの奥に豊かな谷中村があったのだそうだ。明治期、国策による新たな遊水地造成の際に谷中村は水底に沈んだ。村の祖先の墓と大きな記念碑がちょうど僕らの立った土手道の背後にある。

目を正面に巡らすと、葦原のやや右手奥に、大きな水門を岸辺に備えた人工の貯水湖が満々と水を湛え、目路のとどく限り遙か彼方へと拡がっている。渡良瀬水系の増水量を吸収し、最終的に利根川へと適宜に落とし込むための遊水地だ。この近くに昭和 22 年のカスリーン台風で決壊した堤防の位置を示す石碑も有るそうだ。巨大な貯水湖は、風が起こしたさざ波に、陽の反射をキラキラざわめかせ、対岸の景色が霞みこむ辺りへ続いている。僕らが今いる土手は栃木県で、彼方の対岸のビル群は茨城県の古河だ。また正面に、真東の地平線から単独で、青い二瘤姿の筑波山がぼっかり飛び出ている。

と、下方から風によって生々しく空中を跨ぎ越えて、ブラスバンドの演奏が意外なほど間近に聞こえてきた。ブラスバンドの位置は木立で隠れ、ここからは指差すことが出来ないが、

今のは練習だったのか、曲半ばで音は不意に跡絶えた。これから僕らが下って行く駐車場辺りに人々の点々がうごめいていた。

< 5 >

大会案内によると、集合場所は北エントランスの駐車場に隣接するロータリー型広場だ。駐車場で僕は、走りやすい軽装に上下を着替えた。足もともランニングシューズに履き替え、ヘッドギアを肩にさげた。今日の僕は、父の代役だ。

母の詰めてくれたポットの紅茶を僕に一杯注いでくれた後、父は調節可能なアルミ杖を突いてまだ曲がらない左膝を引きずりぎみにして、僕より一足先に集合場所へ出ていった。参加氏名を受付で登録しゼッケンを受け取るためである。

遠ざかる父を眺めながら僕は紅茶をすすった。ゴムのグリップ付きアルミ杖は、ホームセンターで母が求め父に持たせたものだ。まさか遊水地がこんなに広いとは思わなかったから、杖があって正解だ。集合時刻は十時である。予想より早く着いてまだ余裕があったから僕は辺りを眺めた。

僕と同じようにサイクリング用の軽装に着替えた大人があちこちにいる。車は四十台ほど数えた。地味なグレー塗装のマイクロバスも数台ある。ナンバープレートに見える地名はまちまちだ。一番遠い地名では横浜ナンバーがある。中には家族でバーベキューセットを後部トランクから出して組立てたり、キャンプ道具一式を台車に乗せ貯水湖の方へ運んで行く夫婦もある。空は雲の少ない快晴で、午前なのに陽ざしが強く、僕は肩や首筋に日焼け止めを塗った。五月初めといっても、備えを怠ると地面からの照り返しで結局は火傷し、泣きをみる。それから早飯にして少し腹ごしらえをした。

< 6 >

ブラスバンドが本格的に鳴り響きだした。僕は車に施錠し、広場の人混みにいた父へ鍵を渡した。広場には大会の横断幕が掲げられ、関係者が三百人ぐらい集まっていた。その周囲には、偶然この催物に気づいた一般の人々が、やや遠慮気味に離れ、何だろうかと興味津々で見守っている。

ブラスバンドは濃い緑のネクタイの男子高校生ばかり十五人の編成で賑やかな演奏だ。僕と同じ位の歳だから、きっと休みのところをこのイベントのために、近隣の私立高から借り出されたのだ。演奏が一段落すると、拡声器を使って主催者代表の挨拶が幾つかあった。それから、ペアを組むことになる先導者と乗手の名前が一組ずつ全員分紹介された。その総数は五十組ほどで、一組ずつに大きな拍手が湧き、中村亮という僕の名前と共に読み上げられた相手は、今福孝司さんという方だった。むろん初対面の人だ。

盲人の方達はマイクロバスに分乗して来ており、やはり僕ら先導役と同じく、動きやすい軽装に着替えていた。僕は父の手で全盲の今福さんに引き合わされた。まずは握手を交わした。彼の手は非常に柔らかな感触だったが、その底に握力の強さが感じられた。僕と父と今福さんとの三人で、広場中心の円形壇を縁どる低い石囲いに腰をかけ、お互いの気分が練れてくるまでしばらく話をした。周りにもそういうペアが沢山座っていた。自己紹介をしたり親しく談笑もし、やがて雰囲気の良い頃合いになったら二人乗り用自転車（タンデム）に取り付いて、ペアの息合わせをするのである。

< 7 >

後ろでペダルを漕ぐ今福さんへ、父から以前教わった通り、僕は急がずはつきりと合図の声をかけ始めた。他のペアの進路妨害をしないよう気をつけてロータリー広場を慣らし走行で何十遍もゆっくりと回った。その間、アルミ杖に半ばもたれかかった格好の父は、如何にもじれっただがよく我慢し、時々僕に適切なアドバイスを投げってくる。つい昨晚まで父は、自分でペダルを漕ぐつもりでいた。でもとうとう左膝が自身の意志ではまならぬと悟ったから今日はぐっところえているのだ。

他の先導者も、弱視や盲人を相方として、タンデムの慣らし運転にロータリー周りや広場中心から放射状に伸びる何本かの遊歩道を有効に使った。先導者は、一々の声の合図を無理なく相方に納得してもらうまで、下手にあせらず悠々と過ごす。各ペアの息は次第に和気曖々としたものになった。この大会は、ヨーイドンで一斉に競争したり、周回レコードを縮め合う勝負ではない。盲人の方に、日頃あまり味わう機会の無いサイクリングを全身で楽しんでもらうのが唯一の目的だ。勇気のある彼等に、先導役は少しばかり力を貸すだけである。

「次、右に曲がりまーす」とか「一旦止まりまーす。いいですかア」と聞くとか、「今度は左回りでターンしまーす。ハイッ、今曲がりに入りまーす」とか伝えるのである。僕はこれが初の経験でなく、二度目だ。ただし前回は父の組んだペアを部分的に補佐しただけである。全くの一人きりで全盲の方を乗せ、お世話するのは初めてだった。

< 8 >

しかし今福さんの勘の良さには驚かされた。彼がまごついているように思えたのは練習の最初の二、三周だけだ。じき体で覚えてしまったらしいペダルを漕ぐリズムといい、カーブに入るときの重心移動の的確さといい、ちっとも僕に負担を感じさせず、とても自転車に初乗り体験の人とは思えなかった。照り返しの日向で汗をかいた僕らは、いよいよ呼吸が合ったので、ここらで一休みすることにし、二人乗り自転車をかたわらに置き、円形の石囲いに坐った。父は、向こうの方で顔見知りの事務局の人と次回の開催予定の話をしていた。

僕と乗る今福さんの外見は四十歳前後の感じだ。でも、艶の良い顔色や声に張りのある話し方や、微笑の変化に富む表情から推すと、実際はもっと若い気がしないでもない。大人の年齢は、少年に比べると見かけほど単純ではないようだ。

「今福さん、漕ぐのが初めてでは、足が張ってきませんか」と僕は尋ねてみた。「早すぎるようでしたら遠慮なくそう言ってください」

「はいどうも。わたしは足は丈夫です」と隣で今福さんが答えた。「歩くのが好きなものから毎朝近くの公園を、一定のコースで散歩しています。ちょくちょく物にぶつかったりしますがね」

膨らみのある何ともいえない柔らかな声の持ち主だ。まぶたごと眼窩の奥へ窪んだ目を、ちょっと上向き気味に反らし上げ、幸せそうに笑みながら受け答えをする人だ。常にシャキッと背筋を立て、両手は膝の上にきちんと揃えている。

< 9 >

「亮さん、ここから貯水湖の岸までは近いのでしょうか？」今福さんが僕にそうたずねた。

僕は中腰になって立ちあがり、この広場から湖畔へと向かう広い一本の石畳道を遠くまで目測した。

「千歩ぐらいですかね」と概算で答えた。

「千歩。そうですか。時々風の向きによって、水が岸辺に当たる砕け波の音が聞こえてきます。湖岸は固くて凹凸のある構造のようです。たぶんコンクリート製ですか」

これを聞き僕は単純に驚いた。そばまで行って手で触れた訳でもないのに、今福さんは湖岸の状態がわかるらしい。試しに僕も目をつむり、耳を澄ませてみた。すると結果は、目をあいていた場合よりも頭上のどこか高くに上がった雲雀のさえずりの存在が、ややくっきり聞こえた。けれど、遠い岸の波音など、とても聞き取れるはずがない。

思わず僕は尋ね返した。「今福さん、この遊水地に以前来たことがあるんですか？」

「いえ、今日が初めてです」今福さんの目顔は虚空へにっこりした。「ですがここは、音の反射が少なくて気持ちが良い所ですね。からだは空の上の方へ吸われて行く心地がします。亮さんこの一帯は相当に広いのでしょうか、どんな所ですか？」

彼の笑みはますます拡がり、日の愛撫を浴びるように首を反らし、天を仰いだ。彼の動きに倣って僕も底の深い青空を見上げてみた。空の上に身が吸われる感じとは、雲雀の声が耳に澄んださっきのような感覚かと思い、僕はこう返事をした。

< 10 >

「はい、今福さん、この湿地帯はとても広いです。僕もこの遊水地を見たのは初めてですが、けさ父と着いたときびっくりしました。その時に高い土手の上から貯水湖を含むこの遊水地の全景を眺めました。貯水湖の向こう岸が、空に溶けるほど遠かったです」

すると今福さんは小鼻をうごめかし、僕のほうに柔和な笑みを向け直した。その眉根が物を見るように持ち上がり、少しほっぺたも紅潮し、多分、内心何かを期待する高揚の顔付きなのだった。

「亮さん、前から今日を楽しみにしてきましたのです。案内を、どうぞよろしくお願いします」

年下の僕に向け、今福さんは体を二つに折り、しばしその姿勢をとどめた。

あわてて僕も、「いいえ、こちらこそ何も解らないですがよろしく」と深く頭を下げた。

いよいよ父の代走をする時刻が迫った。次第に僕は顔面に熱い血がのぼり、緊張してきた。

五キロメートルを越す周回コースが、その一部に設定できる巨大な貯水湖だ。湖岸の縁道を使い、二人乗りサイクリングで回りながら、先導役が後部の盲人の方に、風物をあれこれ説明するのである。それによって、進行中に周囲で移り変わる水辺の様子を、あるスピード感をもって盲人の方が想像し、じかな体験として楽しむことが可能になる。

父の話では、こういう催物が安全にやれる広い場所の確保も機会も、国内には数少ないという。次の開催予定地は埼玉県とかで、秩父路のかなり奥まで行かねばならないそうだ。

< 11 >

ゼッケン番号を数組ずつ区切って案内係の人が読み上げ、集合をうながした。該当ペアは、緊張気味の笑顔でタンデムに跨がり、出走地点へと向かう。やや狭いゲートが紙テープで仕切っている。そこから一組また一組と無事に出発してゆく都度、周囲から盛んな拍手が送られた。プラスバンドもここが聞かせどころと、次々に軽快勇壮活発な曲を披露しつつ楽音で

出発を祝うのだった。

僕と今福さんのゼッケン番号が呼ばれた。期せずして僕らはお互いに声を掛け合い、出発ゲートを出る直前のペアの後方についた。父がゲート脇に来ていて、僕の目をじっと見入った。

「忘れるな亮、競争じゃない。今福さんのペースに合わせてゆっくりな。二人で周りの景色を楽しんで来い」

と言って右手で小さくガッツポーズをした。僕も父へガッツポーズを返した。緊張で足がブルブル震え胸が高鳴っていたが、今福さんをお世話する責任感の方が勝った。その時、係の人が時計を見、腕を上げたので、「今福さん、今から三つ数えてゆっくり出ます。三、二、一。はい、せーの、今出ます」

カウントを区切った僕は、ペダルをじっくり漕ぎ出した。後ろで今福さんの足が僕のペースに合わせてペダルを回し出した。弾みがつくとすぐにタンデムの頑丈な車体が軽くなり、小気味よく、徐々にスピードが増す。沿道両側にゴッホの油絵みたいな、姿のうねる植樹のある直線五百メートルの石畳を快調に駆け抜け、その末端に達しかける。この先は、かなり周長のある貯水湖周遊コースで舗装路だ。

< 12 >

「今福さん、少しスピードをおさえましょう。もうすぐ貯水湖です、次の合図で右折します」

「はい」

スピードを一旦殺し、石畳数万枚の継ぎ目の小さな凹凸感から抜け出ると、すぐに右折し、舗装のよく利いた湖岸沿いを走る。すでに湖全体の見晴らしを遮る物は一切無く、青空だけが大きく頭上に開け、湖面を渡って来る五月の爽風がじかに肌で感じ取れた。サイクリングに、ウインドブレーカーの要らない季節だ。暑くなく寒くなく、一年のうちで一番素晴らしい若夏の風の中を突き進む。

「貯水湖の周回路に入りました。今福さんこれからしばらくはずっと左回りです」

「はい、音で分かります。とても大きな水面がすぐ左側に続いていますね。細波が沢山立っていますね。波の表面に触れてくる風が、水分と水藻の匂いを含んでいます。家の中には嗅げない、動く水の匂いです。気が清々として生き返ります」

今福さんの声が一段と弾む。振り返らずとも彼の輝く笑みが見えるようだ。思えば僕は、この人の喜びの声を受けて走る帆船のようなものだった。後ろから彼が、漕ぐ力を僕に与えてくれている感じがした。それに、さっき彼の言った通りで、湖岸の傾斜は波消し用のコンクリート・ブロックで覆われ、打ち寄せる細波が砕けている。ジャブッ、ジャブッと無限に鳴るその音が、永遠の一瞬ずつみたいが続くのが聞けるのだ。遊びに来ている人々の声も、引っ切りなしに発されて遠近から響く。

< 13 >

「今福さん、湖水の周りに大勢の人が来ていて、大人も子供もみな夢中で遊んでいます。今僕らはその人達とすれ違っています。聞こえますね？」

進行途中で出会う人々の自由なジョギング姿や、膝当てを付けたローラー・ブレードのバ

ック滑走や、親子でわいわい言いながら来るサイクリングや、リュックを背負った熟年者一行の悠長な遠出などを、かなり手前から避けながら、僕は刻々と変化する周りの様子を今福さんに口頭で伝えた。

湖岸沿いには点々とミニ四阿<sup>あずまや</sup>がある。四阿の日陰には老夫婦や恋人同士が一組ずついて、お弁当を開き、憩っている。老夫婦の手にも、持ち歩き大流行のペットボトル飲料がある。多くの場合、その足許には眠たげな目の愛犬も一緒にいる。

花期を終えた藤棚がある。その藤棚の周りの草地に小型テントを張り、コンロに火を起し、デッキチェアを並べ、保養地みたいに寝そべり湖面を眺める人々。女性は皆少女までが野球帽を冠り、後ろの穴から髪を一房たらしめている。

沖ではウインド・サーファー達が思い思いに帆走中だ。しばしば起こる転覆と、旋回時に鳴る帆のパーンという破裂的な音がしきりである。岸边にはよく日焼けした男女がいて、銘々のサーフボードを引き揚げて寝かせ、ウエットスーツに濡れた髪を縮らせながら、もっと良い風待ちをしている。

かと思うと、ミニチュアヨットがすいすい走り、岸からのラジコン操作で帆をくるっと回して風をはらみ、本物<sup>かし</sup>さながらに傾いで回頭していた。

#### < 14 >

沖合遠く、目立つオレンジ色の固定ブイ（浮標）にのって三々五々、翼を日に干しているのは真っ黒な鵜だ。広げた翼が、人間の子の両手幅以上もありそうで、羽を止め、じっと動かずにいる姿は、日に干したコウモリ傘に見えた。

中でも、僕が一番正確に今福さんへ伝えようとしたものは、もし上空から見下ろせば巨大なハート型に近いはずのこの貯水湖が、大きくは三つの水域に分かれていると解ったことだ。三つとも互いの水は自由に出入りしている。今日の周回コースは水上を連絡橋で横断するから、三つの湖面は左右に代わる代わる現れ出る。走行コースは水辺を離れることが無く、常に湖面を対岸まで見晴らすルートだ。従って今福さんの耳を遮る邪魔物は何もない。

交通法規で一般道を走行出来ない二人乗り用自転車が、今日の催しのお陰で僕らの他に五十組、一周五キロ以上のコースを周回している。すでに連絡橋を渡って湖を彼方へ至り、湖面中央の中の島や、更に遙かな対岸を快走するペアの幾組もが粒じみて小さく見えた。しかし、遠目にも赤いゼッケンがちらちらするし、二人乗りという姿が他にない特徴だ。向こうからも僕らが見える事だろう。

「亮さん、すいません、見てもらえますか。岸のどこかに柳の木がありますか？」

後ろから今福さんにそう問われ、僕はペダルを漕ぎながらぐるっと周りを見回した。そばに柳の木はなかった。そう答えようとして、待てよあれは、とんでもなく遠い所に柳らしい影がある。

#### < 15 >

つまり、本物の小型ヨットや手漕ぎのカヌーが一堂に集まり、自由に往来するブロックを隔て、中の島の辺に楊柳らしい高い樹が固まっている。風向きに沿ってしなう枝が確かに見えるのだった。

僕がそう答えると、今福さんは声を高めた。

「ああ対岸なんですか。柳の若葉の匂いの変化しながら、さっきから漂って来ています」

僕はもう今福さんの確かな感覚に驚かず、彼の発した次の感想を素直に聞いた。

「春先に芽吹いた柳が、やっと柳の樹らしくなる頃の葉の匂いです。ぶつぶつした感触の若い葉が丸い感じで、まだ長くは尖らず、固くない。小さい頃に母から手を添えられて、これが柳の若葉だよと教わりました。ああ久しぶりの匂いです」

この人は、人生途中からの失明ではなく、まだもの心がつく以前から全盲だそうだ。

僕は尋ねてみた。「じゃ、後で自転車を停めて柳のそばに行ってみましょうか？」

「いいですか、お願いします。柳の葉に手を触れてみたいです。でも一番最後でいいですかから」

「分かりました。周回の最後にそうしましょう」

僕らは最初の左折をし、今度は風をまともに正面から受ける湖水の横断路に入った。右に現れたのが新たな湖面で、岸边に釣り人が多く、反対側が今まで沿ってきた湖面だ。「今から少しの間登り坂にかかりまーす」と僕は知らせた。自然にペダルが重くなるから今福さんもわかったはずだ。足に一段と力を入れ、西橋への緩い傾斜をのぼった。

< 16 >

坂なので、今福さんも足に力を込めている。タンデムのチェーンは前後一体だからそれがわかる。

「今福さん、いま橋の上に出ました。登り坂は終わりです。これから橋の上をゆっくり通過しまーす。橋の上は立ち止まる見物人が多いでーす」

中央エントランス方面から続々とやって来る人々を避け、スピードを落としながら僕は言った。

「はい亮さん、長い橋の上ですね。波の音がこの真下で橋桁に当たり、跳ね返って響くようになりました。飛び散る水の音がよく聞こえます。これは水面から、かなり高い橋ですか？」

通行人にぶつからぬよう注意しながら僕は欄干の向こうを見下ろした。湖上にうねる波が、無数のうねるシワや窪みを休まず揺り動かしている。

「当たりです、今福さん。橋の下は水面まで、背丈の三倍ぐらいでーす。意外と高いものですねえ」

さぎ波は微風に押され、リズムカルに進む揺らぎを連ねる。その時だ、僕の目の隅の五六カ所で、横腹を日にさらした銀鱗がきらっと光り、瞬時にポチャンという音で水面に落ち、素早く藻の緑色がかかる水中に消えた。跳ねた魚は掌の倍以上のサイズで、鮒か鯉だったようだ。湖面付近の水は陽光で温まり、中に漂う藻のつぶが、明るく透け、波に似た魚影が走る。一瞬の観察だが煌めく魚影は多かった。

「亮さん、いま魚の匂いがしました。ぬらっとした鱗の匂いです。下に魚が泳いでいますね」

後ろから今福さんが嬉しげに言った。匂いってそんなに早く伝わるんだろうか。

< 17 >

三周目に入ろうとしたとき、湖畔に立っている父の姿を遠くに見つけた。父は何げない風をしているが、僕達のペアを目捜ししている。千歩以上も足を引き摺りながら石畳道を歩いてきたはずだ。

「今福さん、この先の岸辺に、父が立って僕らを見ています。スピードを落として少し左へ寄せます」と僕は断った。「いいですか」

「はい」と今福さん。「さきほど、声の感じではお父さんは足が少しきつそうでしたね」

僕がこの代役を果たす父の捻挫の件を、周回中に話したので、すでに今福さんは知っている。

「すぐ近所にある接骨医院にも行かないんです。母がいくら頼んでもね」

「責任感からでしょう。これが終わったらお父さんは安心して治療に行くんじゃないんですか？」

そうかなア。僕は漕ぎながら遠くの父へ手を振った。それで僕らの接近に気づいたらしい父へ、

「父さーん、無理せず坐ってたほうが良いよォ。帰りの運転が大変だから」

と叫んだ。すると父は眉根を寄せ、下唇を尖らせた。父のくせの一つだ。亮、何をお前はお節介な、と言う時の表情だ。父は軽く手を上げて手首から先をひらひらさせ、いいから俺に構わずそのまま停まらずに行け、という合図を返してきた。その前を、僕と今福さんのペアは再び漕ぐスピードをぐんぐん増しながら風のように通り過ぎた。

「亮、飛ばしすぎるな」宙を追い掛けてくる父の心配声がした。「今福さんにご迷惑だぞ」

< 18 >

たちまち父の姿は後方に小さく縮んだ。杖を突く、斜め気味の孤影は、何だか僕の父ではないみたいだった。

「うちの父は少し強情っ張りです。たまに家族が困るときがあります、とくに母がね」

「いや、息子さんを信頼しながら、一方とても心配してくれています。お父さんの声の調子で解ります。気性の男らしい良い方だ。亮さん、お幸せです」

何を聞いても今福さんの笑みは絶えないのだ。こんな人に出会ったのは、僕は初めてだった。

四周目に入る際、さっきの岸辺りに父の姿を探したが、もう見当たらなかつた。それで僕は安心した。

きて、これだけ周回コースが長く、湖面が広いと、途中で休まない限り、他のペアと併走することもまれだ。だから路上の障害物に気を配るとき以外、今福さんとの遣り取りに僕は集中できた。盲目の彼の示す反応に、いろいろ教わったと思う。

コースを何周かする内に今福さんの頭脳は、徐々に外界の情報を貯え、透明な知覚地図を作成していたようだ。つまり、目が見える者なら、通常はあえて取りこむ必要の無い感覚情報の有効活用だ。たとえば木立や欄干や縁石に反射するタイヤ音の差異、路面からペダルに伝わる負荷の変化、水門の下で常に渦巻く水音、湖畔のクワやグミの木が発する各々異なった植物の匂い、そして、頬に当たる陽の熱や風向きの変化といった外界の変化で、それらは皆すべて現在地を知るに重要な情報だ。

また、その他、微妙すぎてどう言えば良いか僕にはうまく説明できない現象があった。

< 19 >

それは周回中に今福さんが僕へ発した質問から推すと、どうやら振動源から押し寄せる波

だ。

まわりの開けた場所では、地上の町や工場、鉄道や自動車や工事現場などから立つ様々な雑音が互いに鳴りどよもし合いワーンと唸りながら水面の波紋のように空へ拡がる。空中を伝ったその振動が、また四方の物に届くと相手の材質や密度差によって、吸収され跳ね返され、再び辺りに飛び散り、こだまの強弱や遠近、上下左右の空間的な分布をなす。今福さんの耳や顔の皮膚は、その<sup>こだま</sup> 筈を捉える器官だ。頬に音の波が触れたのを感じ取るのだ。

ある周回中に僕は、この上空右方に旅客機の定期航路があるらしいと今福さんへ伝えた。ジェット音の尻尾を遙か後方に曳き、高空を切ってゆく銀色の機影が同じ方角に通うのを見たのだ。雷鳴が空中を十キロも伝わらないという説を僕は思い出した。だから彼我一万メートルとは離れていない。

すると、今福さんにこう訊かれた。

「ジェット機の通過音は時々きこえていました。亮さん、この正面向きに山がありますか？」

その向きから跳ね返って来る波動が、今福さんには、他の方角のものとは多少違って感じられるらしい。方位で言うと、この時僕らは湖岸をほぼ真北へ向かっていた。僕が目を上げたら、正面遙かにへだたって、頂上<sup>びょうぶ</sup>の極めて平らな屏風状の山があった。そびえ立つ孤峰ではなく、平野の縁取りの感じだ。陽光を浴びたその山肌は豊かに青く、より奥の山々と共に夏衣の襞をなしていた。

< 20 >

ぐるっと四方を眺め回しても、湖畔からは、この北側以外に山は望めない。後に地図で知ったが、正面は栃木県南部の大平山だった。貯水湖から、かなり隔たっているが、今福さんの感覚は何周かするうち北向こうにあるこの山の存在を聴き取ったのだ。彼と一緒にいて僕が知った音の世界の不思議さだ。僕はその山の外観をこう伝えた。

「大きなカボチャをどっしり据えたようです」

今福さんが笑んだ。「カボチャ山ですか？」

それから又数周すると、湖畔沿いの所々に目だっていた赤いゼッケンが少なくなった。周回をやめてスタート地点へ戻った組が多くなったかと気づき、僕はポケットの時計を出してみた。出発からもう四十分近くが過ぎ、終了予定の正午に近かった。

僕は言った。「今福さんもうじきお昼です。次の周回の途中で、柳の所に寄りましょうか」

「はい、ぜひお願いします。でも、時間のたつのが早かったですね」

もう一度、長い西橋を渡り、湖上に浮かぶ姿の中の島でタンデムを停めた。そこからは今福さんに僕の肩に掴まってもらった。周回路と縁石との間の段差に注意して緑地へ上がり、青草や石畳を踏み、楊柳の下まで行った。楊柳は見上げるほど高く五、六群の林を成している。その下が急にひんやりと感じられたのは、しだれ柳が風にそよいでサヤサヤ、サワサワ鳴りながら、日陰と木漏れ日とを交互に与えてくれるせいだった。しだれ柳のゆらぐ青い日陰が今福さんの上気した顔を撫で、往復した。

< 21 >

柳の林の根方には、青いシートを敷き、家族とか仲間内でお弁当を広げるピクニック組や、顔にタオルをのせた、恋人の昼寝組もいる。姿を見せぬ鳥も何羽か柳の奥で鳴いているのだ

った。

今福さんは、細いしだれ柳の一本をまさぐり、両手で挟むと、拝むような姿で若葉と顔とを近づけては離し、何度も葉の匂いを嗅いだ。彼の小鼻がピクピク動き、眉毛が震え、小声で何か独り言をボソボソ洩らすうち、葉をその頬に押し当てた。

僕は黙って脇から見ていた。彼の親指と人差し指が、枝に沿って細やかに動き、柳若葉の裏や表、葉の付け根を丹念にまさぐっている。彼の顔は活発な瞑想にふける感じで、指先と葉とが立てる微音を聞き漏らすまいとするかのように耳を近づけた。盲人の楽しみ方の一つなのかも知れなかった。

いや、何も盲人の、と限定する必要はない。よく思い出してみると僕も幼い頃、例えば陽のポカポカし出した春先の野原で、隠された綿毛のような銀白色のツバナの穂を、キュッと引き抜き、耳のそばでクルクル回して風切り音を聞いたり、耳穴を撫でて柔らかな穂綿の感触を覚えたり、口に含んでみて微かに甘渋い味を知ったり、鼻に当てて嗅ぎ、理由も無しに切ない息を吸い込んだものだ。僕がそうしなくなってから久しいだけである。

我々のそばを、知らない人や子供が通るので、危ないかと思い僕は今福さんの腕に軽く手を添え、いつでも彼の注意が引けるようにしてあった。身長は僕のほうがかなり大きいのだった。

< 2 2 >

「遠い子供の時分に…」しだれ柳を手から離し、顔を宙へ上げた今福さんが言った。

「亮さん、さっきも言いましたが、母親に手を添えられ、この若葉の匂いを知りました。昔のことですが、忘れないものですね。私の中にある一番最初の記憶です。私事ですが、実は見えない障害がどういう不便なのかを、幼児から少年期になるまで私はよく解っていませんでした。食事などは母が毎度手の届くところに置き並べてくれて私に一つ一つを触れさせ、茶碗や箸やおかずが、どんな形やどんな手触りで、どこにあるのか皆判りましたから一向に困りませんでした。遊ぶときも近所の子を母が呼んでご馳走し、私一人を仲間外れにしないよう配慮してくれたのです。散歩も入浴も、母が私の目の代わりでした。私は普通の子供以上に幸せな少年時代を送ることが出来たのです。今思うと、私の基本的な感じ方は、母に貰ったその時のままです。五歳の頃の私がすなわち今の私です。人は変わりませんね」

そこで今福さんは僕のほうへ向き直ると、両手で僕の手のあるかを探り、すっぱり握り取った。

「亮さん、突然で失礼かも知れませんが、どうかわたしに握手させてください。今日はあなたのご指導のお陰で楽しく過ごし、更に今、幼い日の自分と母に再び会うことが出来ました。今日の事はわたし一生の宝になると思います。忘れません。こんな良い日は二度と来ないような気がしています」

そして、彼が込めた握力は、最初の時よりもずっと強かった。僕も負けずに力を込めた。

< 2 3 >

風で一向きに揺らいた柳の影が、薄みどりの木漏れ日と共に我々の顔の上を通過し、また戻ってきた。彼の鼻の頭が、出発前より赤く日焼けしていた。彼をタンデムの所まで導き、再び二人で漕ぎ出した。

スタート地点に帰着した時、僕らが最後のペアではなかった。僕は今福さんを降ろした後、父を後ろに乗せて湖畔を一周だけしようと申し出たが、父は首を横に振った。父の美学に対して僕が出しゃばりすぎたらしい。父との間では時々こうなる。

もう飛来している夏鳥のオオヨシキリが赤い口に喉を膨らませ、葦原のあちこちで、「ギョギョシ、ギョギョシ、ケリケリケリ」と高鳴きし、縄張り宣言するのを聞きながら、僕は駐車場で着替えた。上空を猛禽類が滑るように翔ぶのが見えた。靴を履き直している時、広場側からマイクロバスが二台続けて出てきた。盲人の方達の送迎車だった。僕のすぐ横を通り過ぎた時、二台目の後部に今福さんが坐っているのが見えた。思わず僕は、彼が盲目であることを忘れ、手を振ってしまった。むろん応答は無い。

彼のいる座席の窓は開いていた。今福さんは僕の目の前を通り過ぎたのに気づかず、窓からの風に顔を当てながら孤独げにじっとしていた。もはや僕と一緒に乗っていた時に笑み続けた、あの豊かな表情ではなかった。それが普段の彼の素顔なのかどうか、僕には解らなかった。可動式の北ゲートまで行った車は一旦停止し、すぐ左折し、クワとコブシ並木の一般道に出るや、こちらへ徐々にスピードを増して来て、僕から程近い柵の向こう側を通り過ぎかけた。

< 24 >

僕は五、六歩駆け寄り大声で叫んだ。まだ時間があると思い、お礼を言って無かったのだ。

「今福さーん、僕です、亮です、さようなら！」

走り去ろうとする車から彼の驚いたらしい顔が振り向きざま、すぐに窓外に現れ、僕のいる位置を探るように肩口まで窓へ突き出された。けれど、その顔の探る向きは、すでに車の加速した分だけ、僕のいるの方角からはやや逸れていた。

僕は大きく両手をメガフォンにして口に当て、もう一度全身の大声で呼んだ。

「今福さーん、僕はこっちこっちーっ、ほんとにありがとうございました、さようならーっ」

途端に彼が僕の現在位置を正確に探り当て、笑み崩した優しい顔がくっきりと見えて、窓から突き出された彼の手が僕に向かって高く打ち振られた。その手の振りは、喜ばしく大きかった。

「亮さーん、お父さんによろしくー」

彼の手には、今日の参加記念の小さなペナントが握られていた。ペナントにはタンデムに乗った漕ぎ手二人の姿がハート型の貯水湖と重なっている。一瞬後、マイクロバスは器用に右折し、高い土手への坂道を登り出したので、今福さんの座っている側は僕からは見えなくなった。彼もそれに気づいたのだろうか。その登り坂の頂上、渡良瀬遊水地の全景が見晴らせる土手上まで出たマイクロバスは、再び一旦停まってみえた。だが、下の車列の切れるのを待っても、そこには数秒といわず、対向車を一台やり過ぎすとバスの屋根がゆらりと向こう側へ消えた。

< 25 >

僕は、こんな風にして誰かと懐かしく別れたのは初めてだった。今福さんの現在の暮らしぶりを僕は何も知らぬままだ。当人に訊くのが恥ずかしかったのだ。一つ深呼吸をして頭上を振り仰ぐと、午前には無かった筋雲が湧き、高空の風に踊っていた。

僕は父の車に施錠した。それから昼食や飲み物の入った釣り用のクーラーボックスを肩に担ぎ、父の待っている辺りまで歩いた。もう広場の周りに人影は少なかった。石畳道の植樹のそばのミニ四阿にいる父を見つけて僕は隣に坐り、腹が減っていたから父の分を半分以上分けてもらって食べた。昔から父は僕の食べっぷりを見るのが好きだ。

父は、まだ湿布薬で自己流に固定してある左膝のまわりを両手で揉みながら、こう言った。

「さっき、向こうで誰かを呼んでる声が二度ばかり聞こえたが、あれは亮だったのか」

「うん呼んだ」と僕は答えた。「膝、痛む？」

「いやちょっと張っただけだ、大したことない。運転は出来る。さっき俺を呼んでいたのか？」

「ううん違う。今福さんがよろしくって」

僕はそれだけを答え、母のつくったお握りと卵焼きを頬張った。お握りにはシラスとタラコとシャケと梅肉とがあり、僕は心地よい疲れに満足しながら途中で噛むのをやめて、耳を澄ましてみた。

目をつむらなくても、貯水湖で立った波音が空中かすかに聞こえてきた。最初に今福さんが言った通りだ。四辺の平らに開けているここは、人声や物音がずいぶん遠くまで届くらしかった。

【初出 群馬県「上毛新聞シャトル版」平成二十二年度ごろ連載】